本を読んで
大人になること

～ 21世紀を日本語で生きる ～

snow--t

はじめに

「子どもは映し鏡」という言葉があります。その子の言動から、育った社会環境や親の姿が見てとれる、といった意味かと思います。今を生きる子どもたちが映すこの世は、はたして良いものなのでしょうか。

現代の子どもは、思いやりの心や自制心に乏しく、正義感やモラルが低い、といった指摘もあります。

一方、日本社会全体を見渡せば、衰退を肌で感じられるようになり、それまであった寛容性は失われ、経済的な尺度で物事を判断しがちになっています。また、インターネットでの価値観が現実社会にも広がり、刹那的、自己中心的な考え方が席巻しつつあります。

排他的にふるまったり、直感的に行動したり、ルールは最低限しか守らないといったことは、ゲインが少ない社会を生き延びるために、ある程度は必要なことかもしれません。しかし、未来を「人」として生き抜くためには、良い人間関係を形成する力も育てなければならないと思います。

何気なく過ごしていたのでは、子どもの心が成長するための「かて」は、十分に得られないかもしれないのです。

そんな時に役立つのが、子どものために書かれた本です。

子どもは本を読むことで、自分とは違う環境でのストーリーを知ることができ、生きるための力を育むことができます。

親は本を子どもに手渡すことで、子どもが見るべき方向を示すことができるのです。

言葉とは

本には、言葉が書かれています。

そして、言葉を読むことで、できごとや感情、考え方などが分かります。

実は、言葉というものも、その言語が使われている社会を映す鏡です。世の中にあふれる事柄を、言葉で「ワケル」ことによって、「ワカル」ように伝えているのです。

例えば、言語ごとに語彙の豊富さを比べることで、ある物事に対する関心の違いが分かります。例を挙げれば、エスキモー語で「雪」は６つあります。しかも、それぞれが知識として持つべき語彙として、最初から分類されて発生した単語なのです。

このように、文化ごとに独自の切り口で環境を認識し、分類・整理することで、言葉は洗練されてきました。そして言葉を使って会話することで、人は文化に根差したコミュニケーションを円滑にすることができるのです。

言葉とコミュニケーション

グローバル化が進む社会において、その共通語である英語教育の重要性は増すばかりです。

日本においても、小学校中学年からは英語の必修化が、中学校からは英語だけで英語を教える授業の導入が検討されています。特に、英語でのコミュニケーション能力を向上させるために、様々な施策が練られているところです。

一方で、日本語でのコミュニケーション能力というものも、存在するはずです。しかも、言葉が文化を映しているのであれば、日本語特有のコミュニケーションであるはずです。それを理解するためには、日本語の特徴を考えるといいかもしれません。

コミュニケーションを考える上で重要な日本語と英語の大きな違いの一つに、話し手の視点が異なることが挙げられると思います。

具体的に言えば、日本語では、自分も相手も一緒に見ていることについて、相手の立場に立って話します。（「つまらないもの」とプレゼントしますよね？）

片や英語は、その場面を外から見た第三者の視点で話します。（主語が必須だったり、完了形のような過去から見通す表現があるのは、そのためでしょう。）

つまり、英語でのコミュニケーションには、誰が聞いても理解できる客観性や論理性が、日本人が考える以上に求められているのだと思います。対して、日本語でのコミュニケーションでは、「おもてなし」のように、相手を思いやり、気遣うことが求められます。

極端に言えば、日本語でのコミュニケーションをないがしろにすることは、日本の社会・文化をなおざりにすることなのかもしれません。

本の言葉とウェブの言葉

本は、「書き言葉」で書かれています。

書き言葉は、会話で使う「話し言葉」と比べ、文法的に整っており、難しい語彙が選ばれる傾向にあります。しかし、それ以上に重要なことは、書かれたものを読むだけで意味が伝わる、ということです。（話し言葉の場合、相手の反応を見て言葉が足らないようなら、もっと話せます。）

最近は、ウェブに書かれた文を読むことで、本の代わりにすることも増えました。

しかし、ウェブ上の文章と本の文章では、必ずしも質が同じではないことを知っておくべきでしょう。実は、日記や SNS で使われる言葉は、テキストでありながら、より話し言葉に近いものなのだそうです。

つまり、ウェブ上でたくさんの文を読み書きしたからといって、書き言葉を使った文章の構成能力や読解力が上がるとは限らないのです。

機能的非識字者という存在が、今、世界各地で問題になっています。自分の近況は SNS にアップできるけれど、取扱説明書や時刻表が読めない人のことだそうです。つまり、自分のことを「話すように」書くことはできるけれど、自分が知らないことを読み取る能力に欠けているのです。

極言すれば、書き言葉を操れないことは、自分を取り巻く様々なものから情報を受け取り、客観的に判断することができないことにつながります。そしてそれは、自分や社会のすべてが不利益をこうむることにもなりかねないのです。

本を子どもに読んでもらうこと

日本語で書かれた本を読むことで、社会の情勢や風潮、それに周囲の環境といったものに左右されない様々な能力を子どもたちは身につけることもできるでしょう。

しかし、子どもが読書する本のことで重大な問題があります。それは、出版されている本と子どもの間にギャップがある、ということです。つまり、本を単に渡すだけでは、子どもは読んでくれないのです。

本の内容と子どもの興味とのギャップ

本と子どもの間にあるギャップの１つ目は、本での出来事に子ども達がついていけないことです。つまり、書かれている内容と、子どもの興味・関心が一致する本は非常に少ないのです。

これが絵本の時代なら、いわゆるベストセラー本を読んでおけば、どんな子どもでもそれなりに聞いてくれます。

しかし、読書ができる頃には、子どもにも個性が生まれています。そのため、大人にも好きなジャンルの本があるように、子どもにも読める本と読めない本が出てきます。

子どもの本選びの最初の分岐点は、フィクションが読めるか、リアルな本でないとダメか、ということです。

子どもの中には（大人でもそうですが)、実際に起こったことが書かれている本しか読みたくないと思っている子がいます。そういった子どもには、伝記や仕事・科学の本がおすすめです。

次の分かれ道は、読んだら面白かった・悲くなった・すっきりしたなど、気持ちが動くだけで OK か、ということです。

成果主義が蔓延する大人の世界を反映してか、何か得るものがないと本を読む気にならない子どもがいます。確かに、小中学生向けのベストセラー本は、社会的トピックスや学校生活に役立ちそうな情報を、ストーリー以外の部分で教えているものも多いのが実情です。

「なんだか難しいな」と、身構えなくても大丈夫。本には、本と子どもの間にある溝を飛び越す手助けをしてくれる頼もしい味方がいます。それが、本の登場人物たちです。魅力的な主人公がいれば、少しぐらい好みと違う本でも読み進めることができます。

このあたりが、子ども達が安心して読み始めることができるシリーズ本のもてはやされる理由でしょう。

本の表現と子どもの読解力とのギャップ

本と子どもの間にあるもう１つのギャップは、文章の難しさや多さと、読解力の間に差があることです。まず、実際の年齢より少し対象年齢が高い本に書かれているような内容でないと、子どもは軽くみてしまうことがあります。しかも、本の言葉を理解する力は、一昔前よりも劣る子が多いようにも感じるのです。

幼い子どもでも遊びやすいおもちゃやイベントが増えたせいで、本から得られる喜びを弱く感じてしまうからでしょうか。また、見ているだけで楽しめるメディアが増えたせいで、聞いて想像する経験が少なくなっているからでしょうか。

いずれにしても、読み慣れていない子に手渡す本は、文章的に理解しやすいものを選ぶのが良いと思います。

まず、登場人物の数は、少ない方が分かりやすいです。小学校低学年までは、国語の授業でも一対一のコミュニケーションを中心に学んでいます。また、キャラクターの性格は、泣き虫やおこりんぼといった、外に現れるタイプのものが理解しやすいです。

次に、お話が時系列に沿って進まないと混乱します。過去を振り返ったり、未来を妄想する回想シーンが挟まれると、それぞれのエピソードを正しい順番になるよう頭の中で移動させられず、間違った解釈をしてしまうことがあります。また、場面によって語り手が変わる切り返しのような文体でも、人物ごとに経験したことが違うことを考慮に入れられず、混乱することがあります。

さらに、実生活での体験を越えるエピソードが登場すると、理解度が低くなります。歴史に基づいた話や、外国の文化、高度なことば遊びなどは、子どもの想像の範囲をこえてしまう可能性があります。

以上のようなことを中身を見て判断できない時は、児童向けの文庫レーベルのお世話になるのが良いかもしれません。古典的な名作を子どもにも分かりやすい現代文でリライトしたものなどもそろっています。

逆に、翻訳もので原著に近いものを楽しみたいのなら「完訳」と表記されているものを選びます。文章を読む力が育ってきた子どもはおすすめです。

「あなたの本」を手渡そう

子どもに本を読んでもらうために一番大切なのは、その子にピッタリの本を手渡すことです。

ピッタリの本とは、自分の気持ち重ねやすい登場人物が出てきて、ストーリーが納得できる範囲で進む「あなたの本」のことです。

また、そんな本を自分だけで見つけることは、人生経験も読書量も少ない子どもには、まだまだ難しいものです。だからこそ、子どもの性格や好きなことなどを知っている大人が手助けしてあげてください。

さらに、本を一緒に選ぶだけでなく、ちょっとした案内ができると良いと思います。実は子ども達は、大人が思ってみない所で、読む気分をそがれていることがあるのです。

例えば、いい本であっても、パッと見の装丁やストーリーに古臭さを感じて、手に取りにくいこともあります。そんな時は、「お話の内容はこんなかんじ」「今の××と似てる話だよ」と、その本を勧めた理由を説明してあげてください。

また、導入部によくある引用や物語の設定部分で、分からない・つまらないと戸惑っていることもあります。「ここは無視していい」「ここまで読めば面白くなる」と、最初にガイドしてあげれば、読むことをあきらめそうになっても踏みとどまることができると思います。

逆に、読み進めるのに役立つ地図や人物相関図などに気づいてないこともあります。そんな時も、「分かりにくい時はここを見るといいよ」と、先に教えてあげるといいでしょう。

子どもに本を読んでもらうために、すべての大人が今まで書いてきたようなことを実践しろ、といっても無理な話だと思います。

そんな時には、公共の図書館や学校の図書室、家庭文庫などに出かけてみてください。そこには、司書や司書教諭、ボランティアがいて、子どもが本を手に取る手助けをしてくれます。

本、テレビ、インターネット、スマホなど、どんな２次元のメディアも、自分で楽しんでいるだけでは、もったいないものです。本の虫という言葉が、どこかしら否定的な響きをもつように、実生活で生かすことができなければ、魅力が半減してしまいます。

その点、本は原始的なメディアであるだけ、他の人とつながろうとする力は強いように思います。どんな子どもも、お気に入りの本は「読んで」と、大好きな人の所へ持ってきてくれるのですから。

あとがき

　子どもに本を手渡す大人が、ひとりでも増えてほしいと願って、ここまで書かせていただきました。
　かく言う私ですが、身近にいるひとりで本を読めるような子どもといえば…、自分の子どもくらいでしょうか。しかも、自分が児童書をあまり読んでこなかったので、いい本を渡せていない気がするのも悲しいところです。
　ですが、棚を私がセレクトした本でいっぱいにして、それを子どもが何気な〜く手に取っているのを見ることを、ひそかな楽しみにしている毎日です。

【参考文献】

「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」、文部科学省、2009
「言語の違い、認識のちがい」、宮岡伯人、今, 世界のことばが危ない!、クバプロ、2006
「今後の英語教育の改善・充実方策について　報告」、文部科学省、2014
「認知と言語」、濱田英人、開拓社、2016
「話し言葉と書き言葉の相互関係」、山本雅子・大西五郎、言語と文化 No.8、愛知大学、2003
「テキスト・メッセージが言語を殺す」、ジョン・マクウォーター、TED2013
「新たな『非識字者』が増えている」、VANESSA NIRI、WIRED、2014
「子どもはテレビをどう見るか」、村野井均、勁草書房、2016
「自分を育てる読書のために」、脇明子・小幡章子、岩波書店、2011

【この本の履歴】

・　2017 年 6 月 18 日　ー　初版を公開しました